

2022年冬鳥ウォッチの報告

バードリサーチ 山崎優佑・平野敏明

2022年度の冬（以下22年冬）は、12月に日本海側の非常に広範囲で大雪が降りました。1月も日本各地で寒波があったと記憶しています。韓国や中国も厳しい寒さだった事が報告されています[1]。一方で欧州では暖冬だったそうです[2]。冬鳥ウォッチの対象種の中にはこれらの地域でも越冬する種もいますが、このような気候は越冬状況に影響を与えていたかもしれません。以下に22年冬の記録状況を報告します。

調査地及び記録状況

22年冬は、北海道から九州までの51名から合計131か所の調査地で各種の合計165件の情報が寄せられました(図1)。調査協力者の人数は21年冬とほぼ同じで、19年冬・20年冬に比べるとやや少ないようにも見えますが、これまでは冬鳥ウォッチの送信フォームから情報を寄せられていたが、現在はバードリサーチのフィールドノートにデータを入力されているという方も複数おられました。なので、調査に協力してくださっている人数は少なくなっているわけではないと考えられます。

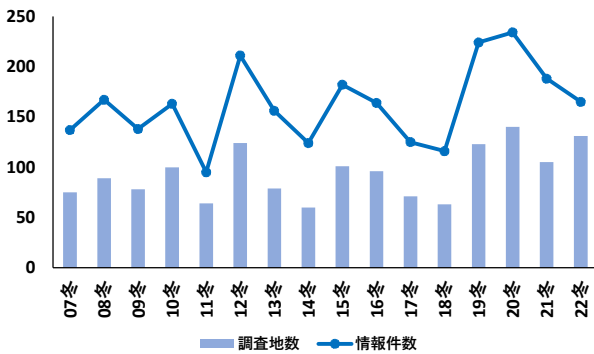


図1. 冬鳥ウォッチの調査地数および情報件数の推移。

22年冬の情報件数を地域別で見ると、関東地方と中部地方が特に多かったです。東北地方、四国地方、九州地方は10件前後の情報が寄せられました。北海道からの情報はありませんでした。

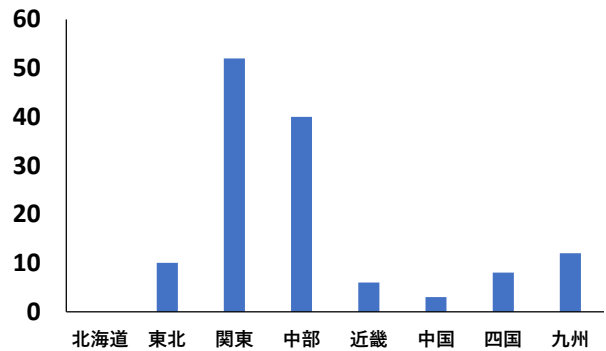


図2. 地域ごとの調査地件数。

22年冬の冬鳥の傾向

22年冬の冬鳥6種の越冬状況を解析するにあたっては、これまでと同様、冬鳥ウォッチの情報だけでなく、野鳥データベース「フィールドノート」に寄せられた12~2月の情報も含めて分析しました。

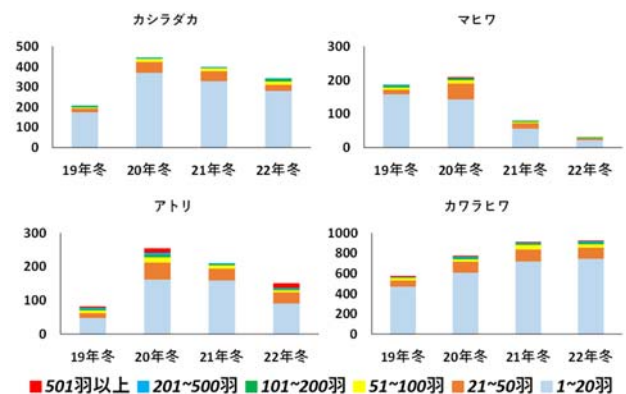


図3. カシラダカ、マヒワ、アトリ、カワラヒワの19年冬~22年冬の情報件数。

アトリは東北地方と九州地方で数千羽以上の群れが記録されています。特に東北地方では複数の地域で目撃されており、数万羽以上の群れが農耕地で採餌している姿も目撃されています。東北地方のブナの実の結実量は令和になって以降最も良い1年でした[3]。大陸から渡ってきた個体群が、豊富に餌があったためそこへ居ついて、その後農耕地へと移動した可能性があります。また、中部地方の日本海側ではほぼ毎年数百羽以上の群れが記録されていますが、22年冬はそのような情報は寄せられませんでした。例年は中部地方で越冬していた個体群も22年冬は東北地方で越冬したのかもしれませんが、21年冬と比較すると情報件数がやや少ないですが、22年冬は数万羽の群れが記録されているのに対して21年冬は500羽を超える群れが記録されていませんので、全国的な越冬個体数は寧ろ多かったと考えられます(図3)。また、同じシーズンで東日本と西日本で数千羽規模の群れが越冬する事も稀です。普段は韓国や中国などで越冬していた個体群も、22年冬は日本に移動してきた可能性があります。

カシラダカも直近の2年と比較すると情報件数が少なかったですが、51~100羽の群れの情報件数はあまり変わらず、101羽~200羽の群れに関しては突出して多い年となりました(図3)。東北の南部や関東などでよくこの規模の群れサイズは報告されていますが、22年冬は近畿でも報告されています。餌が豊富にあって集まってきたのかもしれませんが。

カワラヒワは過去2年と比較して情報件数はやや多いですが、特筆するような傾向は見受けられませんでした(図3)。

一方マヒワは直近の3年と比較すると、21年冬も情報件数が少なかったですが、22年冬はそれよりもさらに情報件数が少なかったです(図3)。群れのサイズも数百羽規模の群れもほとんどありませんでした。また、春の渡りの時期も例年は見られている場所でも目撃されなかったという情報も頂

きました。これらの事から全国的に越冬個体数が少なかった事が示唆されます。繁殖環境が悪化して繁殖成功率が低下しているのかもしれませんが、引き続き注視する必要があると考えております。

イスカとハギマシコは例年と同様、情報件数は他の4種と比べて少なかったです。しかしハギマシコは100羽以上の群れが中部地方で記録されました。

カワラヒワは東北では大きな群れにならない？

カワラヒワは、留鳥で身近な野鳥でもあるためか、冬鳥ウォッチの対象種の中でもっとも多く情報が寄せられています。多くは1~20羽の情報ですが、100羽を超える情報も多く寄せられており、時々、数千羽規模の群れが報告される事もあります。100羽を超える群れの目撃情報は、冬鳥ウォッチと野鳥データベースを合わせて10年冬~22年冬の13年間で183件寄せられています。分布を見ると、関東以南では比較的多くの地域から報告されていました(図4)。一方、東北地方では福島県と宮城県で数か所から報告がありました。それ以外の地域からは情報が寄せられていません。ただし小規模の集まりであれば目撃されています。カワラヒワは農耕地や河川敷で採餌しています。また、バードリサーチが行っている食性データベースによると、アキニレやケヤキの実なども採餌しています。カワラヒワが大規模な群れで越冬できるほど、こういった餌資源が東北地方では豊富にあるわけではないのかもしれませんが。特に農耕地では、寒冷のため、刈り取り後のイネの萌芽による結実が少ないことも考えられます。引き続き情報収集と分析を続けていきたいと考えています。

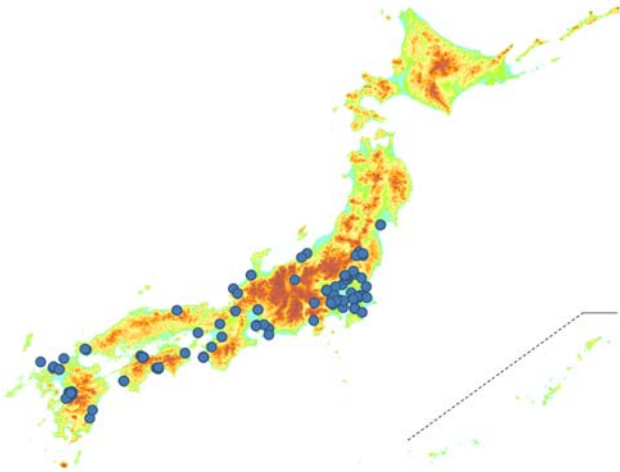


図4. 10年冬～22年冬までに寄せられたカワラヒワの101羽以上の群れの分布情報。

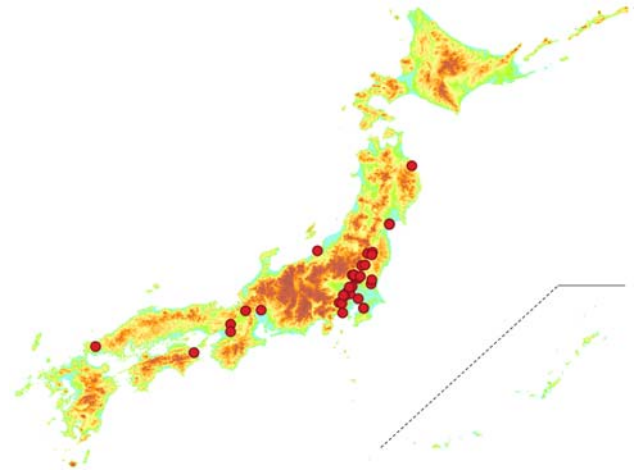


図5. 10年冬～22年冬までに寄せられたカシラダカの101羽以上の群れの分布情報。

カシラダカは関東周辺で大きな群れをつくる？

カシラダカについても100羽を超える群れの分布の傾向について分析しました。冬鳥ウォッチと野鳥データベースを合わせて10年冬～22年冬の13年間で50件寄せられています。その多くは関東地方やその周辺の地域に集中していました(図5)。他の地域でもこのような大きな群れが報告される事もありますが、毎年そのような情報が寄せられているわけではありません。九州地方ではこの期間中100羽を超える群れの情報はありませんでした。カシラダカは世界的に個体数が減少している事が報告されています。以前は日本でも複数の地域で100羽を超える群れが越冬していたが、現在はたまたま関東周辺の地域で越冬する群れだけが残ったのかもしれませんが。しかし過去の個体数に関する情報はないのははっきりとした事はまだ言えません。冬鳥ウォッチでは個体数の変動を調べるため、過去の情報も募集しています。「20年前はここで数百羽の群れをよく観察していた」などといった情報がありましたら是非教えてくださいと考えています。

最後に

2022年度は、全国鳥類越冬分布調査の報告書が出来上がりました。この調査の結果、カシラダカを除く5種について1980年代と比較して2010年代の分布はあまり変化していないか寧ろ拡大している事が分かりました[4]。しかし個体数の傾向については定かではありません。個体数の変動を調べていくためには冬鳥ウォッチでの継続的な調査が必要です。是非また来年以降も調査にご協力いただけますと心強く思います。今回情報を寄せてくださった方々の中には、対象種はいなかったという情報もありました。このように「いなかった」という情報も重要です。そのような場合でも是非情報をお寄せください。また、渡りの時期の情報も分析を進める上で参考にさせてもらいますので、もしそのような情報もありましたらお寄せ頂けると幸いです。末尾ながら、冬鳥ウォッチの送信フォームより情報をお寄せ頂きました皆さまのご芳名を記してお礼に替えさせていただきます。恐れ入りますが、姓と名が分からなかった方については記す事ができませんでしたので、予めご了承願います。また、今回分析を進めるにあたって野鳥データベースに収集されたデータも利用させて頂きました。日頃より野鳥データベースに情報を提供して頂いている皆様にも深く感謝申し

上げます。

井上賢三郎, 一倉行雄, 園村茂夫, 下平宏, 加藤ミナコ, 加藤俊哉, 加藤正敏, 金子凱彦, 権田茂, 五十嵐勉, 山田隆章, 鹿間信弘, 小池順子, 小林由香, 上出貴士, 植松晃岳, 植田睦之, 新井康弘, 森佳子, 西教生, 石原八束, 石原隆志, 千島康幸, 村田愛子, 多田英行, 大村洋一, 大内晴, 滝澤三郎, 中村さやか, 長嶋宏之, 田村久美子, 田中正晴, 田島奏一朗, 渡部通, 渡辺美郎, 渡邊茂雄, 藤江昌代, 藤田和彦, 藤波不二雄, 徳田英雄, 内田初江, 二村一男, 白石ひとみ, 富田恵理子, 武居佳子, 武廣一輝, 務台明, 木村雅世, 鈴木ゆう, 高橋邦年

引用

- [1] NHK(2023年1月24日)厳しい寒さ 中国や韓国でも 中国東北部ではマイナス53度を記録
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20230124/k10013959121000.html>
(最終閲覧日: 2023年5月7日)
- [2] CNN(2023年1月4日)欧州, 暖冬で大量の記録更新 「未知の領域」と専門家
<https://www.cnn.co.jp/fringe/35198097.html>
(最終閲覧日: 2023年5月7日)
- [3] 東北森林管理局 ブナ開花・結実調査
<https://www.rinya.maff.go.jp/tohoku/sidou/buna.html>
(最終閲覧日: 2023年5月9日)
- [4] 植田睦之・奴賀俊光・山崎優佑 (2023) 全国鳥類越冬分布調査報告 2016-2022. バードリサーチ・日本野鳥の会, 国立市・東京.